Re-Spatialize World

氏名：吉原　遼平
学籍番号：1221345
所属研究室：壁画第1研究室

2024年、私たちは地球上のあらゆる場所に到達することができる。途方もないほどに移動しても帰れなくなることはない。全ての建物の用途がわかり、常に自分のいるところの住所がわかる。もはやこの世界に外部はない。そのように感じさせるのは、インターネットやモビリティの発達に加え、GPS技術の普及によるところが大きい。GPSを利用した最も身近なアプリであるGoogle Mapsは青い点とその下に広がる地図によって自分とこの世界の共時的な関係性を指し示す。平面で指示された位置関係を個人が現実世界に当てはめることによって、現実空間はそれ以前とは様相を変え、新たな空間が浮かび上がる。これは、現実世界の再空間化といえるだろう。私たちはいま、再空間化された世界を生きている。そして、その空間の中で、同じGPS技術を使ってさらに別の空間の可能性を試みるのが本作である。

石にGPSモジュールとマイクロコンピュータ、スピーカーを取り付けた作品では、1つ1つの石が上空3万メートルを公転する人工衛星から毎秒発される電波を受け取って自身の存在する位置データ（地球の中心からの角度を経度と緯度で分けた座標）を編み出し、その数値が周波数と音色に変換され、石が音を発する。そして、その配置は、石が今ここにいるという事実から生み出される音の変化を元に決定されている。そして、そのような石の数々がそれぞれの配置の間の緊張関係を生み出し、新たな空間を形成している。その空間は、上空3万メートルから地中奥深くまで、さらに石の生まれた何千万年前から人類が宇宙を植民する何百年後、さらにアートが保存を目指す永遠の時間までもを有している。

サイト/ノンサイト

ロバート・スミッソンは1970年にアメリカのユタ州にあるグレートソルト湖に渦巻き状の土手「Spiral Jetty」を制作した。ランドアートと呼ばれるその作品は、風雨にさらされ、自然の抗いがたいエントロピーによって形を変えることを良しとした。一方、それ以前には「ノンサイト」という概念を提唱し、特定の場所から石や木の一部を持ち帰り鏡などと共に再構成した作品群、地図のコラージュなどをノンサイトの作品としてホワイトキューブに展開している。ノンサイトは場所（サイト）を弁証法的に考えるための対概念であり、ノンサイトの作品は、ある特定の場所を場所として現出させることのできるシニフィアン（指し示すもの）としても機能する。しかし、そればかりではなく、展示空間の中でそれ自体「複合的で動的な何か」としても自立するのである。

ノンサイトの存在は、ホワイトキューブの外で行われる芸術実践を記録した映像や写真、二次的な創作物などを絵画や彫刻同様に芸術作品として認めさせるような状況を生んだ。このことは、ある課題の解決プロセスや新たなコミュニケーションの創出など、実際の場で行われる不定形な行いを芸術作品と主張する根拠ともなった。

モニターに衛星写真が映された作品では、オール、時刻表、靴、首用クッション、カバンなど人の移動に伴うモノにGPSトラッカーが埋めこまれ、ある場所に置かれている。その事実を航空写真とその中にある現在の位置を示すアイコンによってリアルタイムで知ることができる。さらに、その実際の場所（サイト）は人工的で特異な形態を持って現れている。この作品は、サイト/ノンサイトのこれまでの関係性（サイトのためにノンサイトが作られ、ノンサイトはサイトを示すという往還）から脱し、新たな関係性を築いている。同時に、上空からの視点でしか見えない世界と平面に生きる私たち実際の世界のズレを元に新たな空間を生み出そうとする試みである。

私たちは、資本主義によってかつて存在した場所の固有性が失われ、平されて均一化された非場所の上を移動しながら生きている。そんな中、再び場所性を獲得しようとしても、資本主義による価値化、差別化の論理に抗えない。そこで、そんなノマドなデラシネとしての私たちは自由に場所を選択し、移動とともに移り変わる空間に場所性に変わる新たな拠り所を見つけていく他ないのかもしれない。そんな次なる場所との向き合い方の発明が、本作の意図するところである。